

「私たちのちかい」を通して

「私たちのちかい」に親しんでもらうため、3条目の「自分だけを大事にすることなく 人と喜びや悲しみを分かち合います 慈悲に満ちみちた仏さまのように」の味わいを、連研中央講師の漢見覚恵さんに執筆してもらいました。

ご門主が2016年の伝灯奉告法要初日に、私たち念仏者が現実世界でどのように生きていくべきかを示された「念仏者の生き方」。その肝要を2018年に4カ条にまとめられたのが、「私たちのちかい」です(別掲)。そこで「私たちの

「学仏大悲心」

教えのよう「行動」していく

一、自分だけを大事にすることなく 人と喜びや悲しみを分かち合います 慈悲に満ちみちた仏さまのように

私は大学生の時、浄土真宗の基礎を学ぶ講義を1年間を通して受けました。私が念仏者として尊敬していた先生はある日の講義で、「浄土真宗で最も大切にすることは聴聞ですが、聴聞の意味は？」と私たちに問いかけた後、黒板に大きな文字で「学仏大悲心」(七高僧の第5祖、中国・善導大師著述『観經四帖疏』はじめにある「帰三宝偈」の一句)と書かれました。そして、

「この学仏大悲心こそが聴聞の意味です。聴聞とは教えを聞くということですが、聞くところの教えとは何かというと、阿弥陀仏の大悲心です。そして、一番大事なのは、聞くことは学ぶことだということ。学ぶという字は、今は『まなぶ』と読みます

南無阿弥陀仏の大悲が私のいのちに満ちみち

私から他のいのちに向かって放たれていく

悲心を自ら行うとは、南無阿弥陀仏という大慈悲心のはたらきにより、私の身体と言葉と心があるように動かされるということなのです。

「自分ファースト」の私が 大慈悲心に生きていく

私の、生きるための基本的な物差しは「自分ファースト」。何よりも自分が一番大事だということ。しかしこの物差しは、ひとつ間違えると自分の利益を追求するあまりに、隣の人の苦しみに気づかなくなる「自分さえよければ」という自己中心的な生き方に陥ってしまいます。自分が一番大事なのは私だけではなく隣の人も同じです。ですから、自分を大事にするならば、同時に隣の人も大事にせずにはいられないはず。

「私たちのちかい」には「自分だけを大事にすることなく、人と喜びや悲しみを分かち合います」とあります。この言葉は、自己中心的な生き方をしていく私たちに、念仏者として阿弥陀仏の大慈悲心に生きていくことを勧めていくための言葉です。ただここで大切なことは、この阿弥陀仏の大慈悲心に生きることは、念仏者に「しなければならぬ」という「責任」や「義務」や「正義」が課せられるのではないということ。老病死をはじめとする私たちの暮らしている中にある

私たちのちかい

- 一、自分の殻に閉じこもることなく 穏やかな顔と優しい言葉を大切にします 微笑み語りかける仏さまのように
- 一、むさぼり、いかり、あるかさに流されず しなやかな心と振る舞いを心がけます 心安らかな仏さまのように
- 一、自分だけを大事にすることなく 人と喜びや悲しみを分かち合います 慈悲に満ちみちた仏さまのように
- 一、生かされていることに気づき 日々「精一杯」つとめます 人びとの救いに尽くす仏さまのように

さまざまなきつねに、大慈悲心に生きる者として積極的に関わっていく活動を、ビハールといいます。私は今、「子ども食堂」というビハール活動をしています。この活動は、ひとり親世帯などに多い経済的困窮状態の中、食事を十分に摂れない子どもたちや、孤食(独りで食事をしなければならぬ)の子どもたちに、無料で食事の支援と居場所を提供する活動です。子ども食堂は5年前から、毎月2回開催していますが、昨年からコロナ禍の影響で、全国一斉に学校が長期間休みになった時や、夏休み・冬休み・春休み中にも毎日、無料のお弁当を子どもたちの元へ配達するようになりました。

この活動には当然お金も必要なのですが、一方で自身の生活もコロナ禍のために厳しい経済状況を余儀なくされています。その状況を知る知人が「自分の生活が苦しい時にまで、この活動をしなくてもいいのでは」と心配してくださりました。とてもありがたいお言葉でしたが、私はこの活動を休止するつもりはありません。なぜならば、自分の経済状況がどうであろうと、目の前に苦しんでいる人がいるのを見て見ぬふりはできないからです。南無阿弥陀仏の大慈悲心のはたらきは、私にそのようにはたらい

ていたのです。

親鸞聖人は『教行信証』の信巻に、真の信心をいただいた者にそなわる十種の利益を示されています。その中の一つに「常行大悲の益」があります。お念仏の人に常に大悲を行じさせる、南無阿弥陀仏のはたらきです。同じく行巻には、阿弥陀仏の大悲の願いはまるで磁石のようだと示されています。私たちの「ちかい」にお示しした「慈悲に満ちみちた仏さまのように」は、私が阿弥陀仏のようになるのではなく、南無阿弥陀仏という大悲の磁力が私のいのちの中に入り込み、私のいのちに満ちみちて、今度は私から他のいのちに向かって放たれていくということなのです。



漢見 覚恵

連研中央講師
滋賀県彦根市・純正寺住職